

高齢者が安心して住み続けられる団地に！

もみじ台団地で区民フォーラム

団地の高齢者を何とかしたい

1971年に建てられたもみじ台団地も30年が過ぎ、住民も高齢化が進む中で、エレベーターのない団地の階段の上り下りが大変で、実際に在宅酸素の患者さんや障害をもつ住民にとっては、外出もままならず閉じこもりとなっている実態や、介護サービスを利用するにもたいへんな状況があります。06年夏に区内の介護事業所が集まり、事態を改善できないかと話し合い、市への要望も行ないました。またもみじ台内科でも団地高齢者の調査を行ないました。関係者の思いが集まって地域でシンポジウムをやろうと機運が高まり、かりぶ・あつべつやもみじ台内科も加わった実行委員会ができ、フォーラムの開催となったものです。

会場からあふれる参加者

2月18日、厚別区もみじ台管理センターにおいて「どうなるもみじ台団地の10年後」区民フォーラムが開催され、団地住民をはじめ、地域の介護事業所関係者など、会場に立ち見が出るほどの111人が参加しました。

オープニングでは介護サービスを利用している人の実態をビデオで紹介。団地の狭い階段を移送職員が車椅子を持ち上げて送迎している様子などが映し出され、会場から驚きの声が上がっていました。

シンポジウムでは、団地に居住して30年という方や、地域の介護事業所職員、区の予防センター職員、もみじ台内科診療所の堀毛清史所長ら4人がそれぞれの立場から発言しました。

堀毛所長はスライドを使いながら、札幌の高齢化の進行やもみじ台の高齢化の高さ、疾病の特徴、もみじ台内科診療所が行なった団地高齢者実態調査のまとめや、その中で在宅酸素の患者さんの苦勞している実例などを紹介しました。

参加者からも活発な意見交換

フロアからは、30代の男性が「自分は比較的若いですが、今日の話聞いて高い階に住む高齢者のことがよく分かった」、ある介護事業関係者は「団地の方に通所サービスを紹介しても、自分は5階にいて通えないと断る方もいる」などの発言がありました。他の参加者からも、命にかかわる事態も起きており、改善は切実、高齢者が暮らしやすく、安心して住み続けられる団地にするにはどうしたらよいか、つながりが希薄な傾向があるので住民の連携を強めよう、などの意見が出されました。

実行委員会・参加者は、今回のフォーラムを様々なところで具体的に議論していく契機にしていこうと確認しました。



↑ 発言する堀毛もみじ台内科所長
← シンポジウムの皆さん



↑ 会場からあふれる参加者
← 左上・フロア発言
← 左下・閉会あいさつをするもみじ台内科高崎事務長



共同デスク

No. 433 2007年2月21日

北海道勤医協本部組織広報部
Tel 823-0867 fax 821-3701

地域医療を考える道民のつどい

2月24日(土) 14:00~17:00

ホテルニューオータニ(鶴の間)

基調講演: 「社会の共有財産としての医療」

鈴木 厚氏(川崎市立井田病院)

シンポジウム

北 良治氏・奈井江町長、峯廻 攻守氏・西円山病院院長

山本 和利氏・札幌大教授(地域医療総合医学講座)

宮田美津江氏・江別市立病院を守る市民の会代表